

ねぎ

黒斑病・葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）

発生の動向

- 1 黒斑・葉枯病の発生面積率は、令和元年まではおおむね減少傾向だったが、令和2年から令和4年にかけて増加した（図1）。
- 2 例年、6月下旬より発生が見られ、7月上旬から8月下旬にかけて発生圃場率が増加し、以降の発生圃場率は高い水準で推移している（図2）。

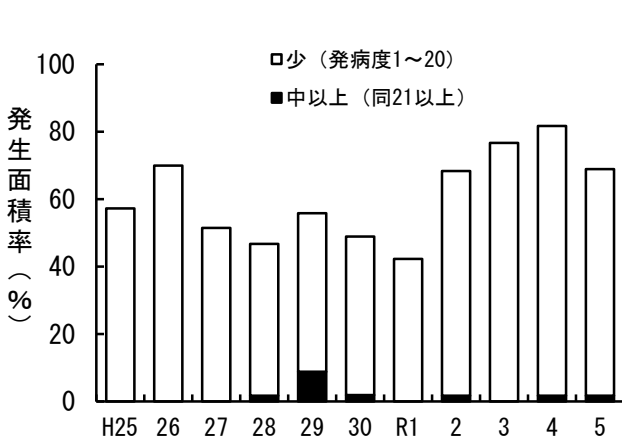


図1 黒斑病・葉枯病発生面積率の年次推移（年間評価）

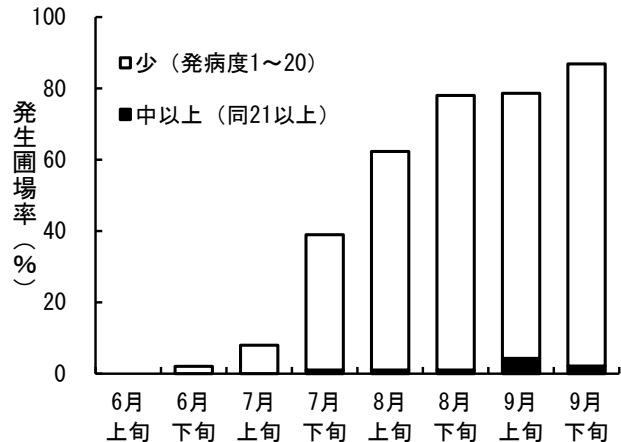


図2 巡回調査における黒斑病・葉枯病の時期別発生圃場率（H25～R4 平均値）



図3 葉枯病

（左：褐色斑点病斑 右：黄色斑紋病斑（赤枠内））

防除対策

- 1 黒斑病
 - (1) 黒斑病の発生を抑制するため、他の病害虫を含めて薬剤防除を計画的に実施する。
- 2 葉枯病（褐色斑点病斑、黄色斑紋病斑）
 - (1) 葉枯病の発生を抑制するため、薬剤防除を計画的に実施する。
 - (2) べと病やさび病、黒斑病の病斑上や、ネギハモグリバエの潜葉痕上に病斑を形成することがある（令和元年度および2年度病害虫防除技術情報参照）ため、これら病害虫の防除も徹底する。
 - (3) 病原菌は収穫残さ等で越冬して伝染源となるため、被害茎葉や被害株等は圃場外へ持ち出して処分する。
 - (4) 8月下旬以降は葉枯病菌の感染が特に多くなるため、効果の高い薬剤を用いたローテーション散布を実施する。
 - (5) 生育後期に肥料切れ等で草勢が衰えると発生が助長されるので、肥培管理を徹底するとともに、収穫遅れにならないよう注意する。

ネギアザミウマ

発生 の 動 向

- 1 発生面積率は平成26年以前は年次ごとにばらつきがあったが、平成27年以降、80%以上の高い水準で推移している（図1）。
- 2 例年、5月上旬には発生が見られ、6月上旬にかけて発生圃場率が増加する傾向がある（図2）。
- 3 春期が高温で経過すると、早期に発生する可能性がある。
- 4 前年の多発圃場では越冬密度が高いと考えられる。

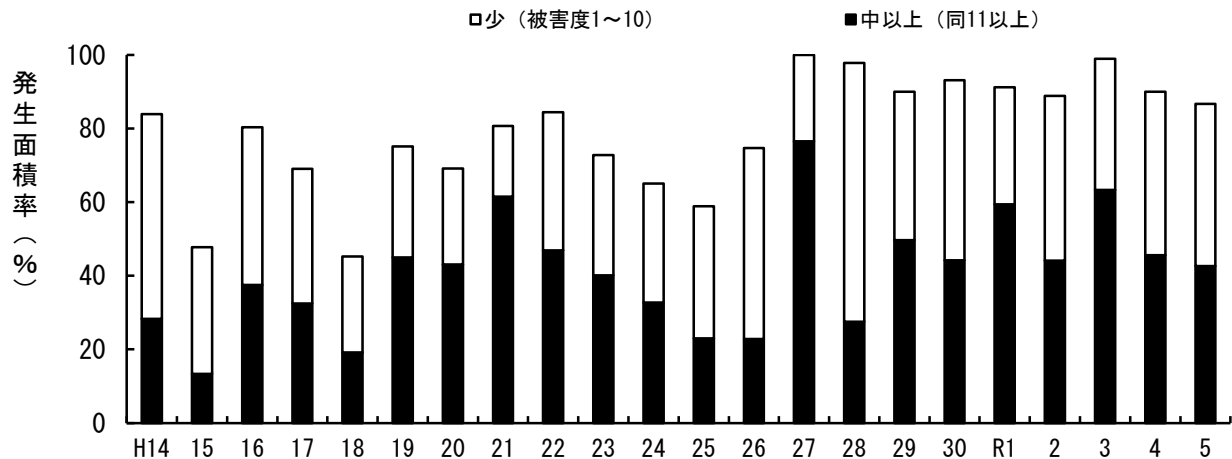


図1 ネギアザミウマの発生面積率の年次推移（年間評価）

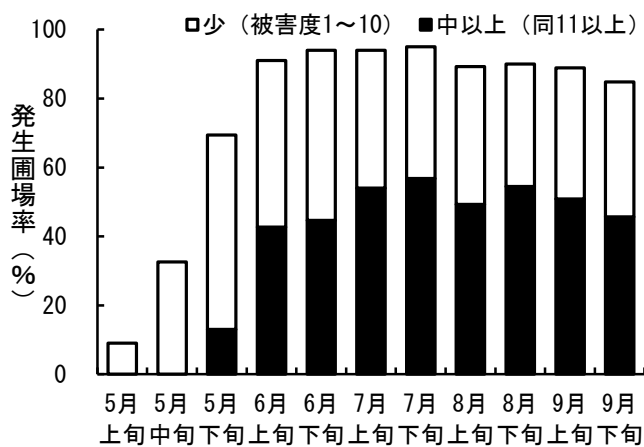


図2 巡回調査におけるネギアザミウマの時期別発生圃場率（H25～R4 平均値）

防 除 対 策

- 1 被害が早期から発生する可能性があるため、かん注処理剤を施用してから定植する。
- 2 発生が見られる圃場では、効果の高い薬剤を選択し、7～10日間隔で防除を行う。
- 3 多発すると防除が困難となるため、発生初期から防除間隔が開かないように防除し、発生が多い場合は特別散布等のこまめな防除が必要である。
- 4 特に周辺に発生源（畦畔雑草や越冬ねぎ圃場等）がある場合や連作圃場においては、発生状況に注意する。
- 5 薬剤抵抗性の発達を避けるため、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。